

一一八 東郷報徳社定款

東郷報徳社定款

第一章 総則

第一条 当社ハ遠江国報徳社ノ師伝ヲ受ケニ宮先生ノ遺法ヲ遵奉シ勤儉推譲ヲ奨励シ報徳ノ事業ヲ立ツルヲ目的トス

当社ハ遠江国報徳社ノ指揮監督ヲ受クベシ

第二条 当社ノ報徳金ト称スル者ハ左ノ如シ

- 一 土基金
- 一 善種金

第三条 報徳金ノ外各種ノ積金ハ何等ノ名称ニ拘ハラズ当社ノ預リ金トシテ取り扱フベシ

但シ小学校児童ノ外一切社員外ヨリ預リ金ヲナサズ

第四条 結社年限ハ明治三十六年三月ヨリ三十ケ年ヲ以テ一期トシ満期ニ至リ総会ノ決議ヲ以テ更ニ継続ノ方法ヲ議定スベシ

但シ五ケ年ヲ以テ一節トシ一節毎ニ方法ヲ修正改良スル事アルベシ

第五条 当社ハ東郷報徳社ト称シ其位置ハ伯耆国東伯郡東郷村大字 村 番地之ヲ設置ス

第六条 当社ニ用ユル印章ハ左ノ如シ

東郷報 徳社印

第二章 土基金

第七条 土基金ハ諸経費支弁ノ為メ又ハ損害準備ノ為メ左ノ方法ニ依テ成立ス

本社ノ下附金

社員ノ寄附金

社外篤志者ノ寄附金

貸借上ヨリ生ズル剰余金

第八条 土基金ノ使用法ハ左ノ数項ニ限ルベシ

社員賞与金

貧困者恤救金

貸付金損害補償金社費

第九条 本社ヨリ下附ノ土基金ハ永ク其名議ヲ存ジテ元金ヲ消費スル事無カルベシ当社ヲ解散ノ場合ニ当テハ之ヲ本社ニ返納スベシ

第三章 善種金

第十条 善種金ハ社員共済ノ為メ左ノ方法ニ依テ成立ス

社員余業積金

社員節儉積金

第十一条 善種金ハ一口ノ積金高参拾六円ト定メ毎月拾銭壹ケ年金壹円二十銭ヲ出金スベシ各自其ノ分限ニヨリ数口ヲ積立テルモ妨ゲナシ

第十二条 善種金ハ社員営業資金ノ為メ申出ニヨリ貸付ヲ行フベシ

第十三条 営業資本金貸付ハ予メ役員ノ協議ヲ以テ貸付ノ程度ヲ定メ貸付ヲ行フベシ

但シ本人現在積立金以外ノ貸付ニハ相当ノ担保ヲ供セシム

第十四条 一時二数名ノ借用申込人アリ金員足ラザル

時ハ抽籤ヲ以テ當籤者ニ貸付クベシ

第十五条 營業資本ノ為メ貸付ヲ為スハ其返納期ヲ月賦年賦若シクハ一期返納トス利子ノ割合ハ時ノ情況ニ依リ毎年ノ始メニ於テ役員会ノ評議ヲ以テ之ヲ定ムベシ

但貸借利子ノ差參分ヨリ超過スベカラズ

第十六条 善種金ハ六分利ヲ以テ積立ツベシ六分以上ノ收入ハ之ヲ土其金ニ加フルモノトス

但シ利子ノ歩合ハ時ノ情況ニ依リ本社ノ認可ヲ得テ増減スル事アルベシ

第十七条 善種金社員ヘ貸付ノ残余アル時ハ社員外ニ及ボシ又ハ預ケ金ト為シテ利殖スベシ

第十八条 善種金ハ本人退社スルモ又ハ何等ノ事故アルモ結社中一切返戻ヲ乞フ事ヲ得ズ

第十九条 善種金積立通帳ハ質入書入売買スルヲ許サズ

但家名相続人又ハ親族ニ限り無代譲リ渡ヲ為スヲ得ベシ譲リ渡シヲ受ケタルモノハ当社ノ社員タルベシ

第二十条 遠江国報徳本社善種寄入金ハ社員名ニ付毎月壹錢以上ノ目的ヲ以テ当社善種金ノ内ヨリ納ムルモノトス

第四章 預金及貯蓄金

第二十一条 預リ金ハ社中奨励及ビ自己臨時備ノ為メ申出ニヨリ之ヲ預モノトス其ノ預入年限ハ本人ノ志ニ任ジ利子ノ歩合ハ時ノ景況ニ依リテ之ヲ定ム

第二十二条 預リ金ハ善種金ト同一ニ貸付ヲ行フベシ

其貸付上ヨリ生ズル利益ハ之ヲ土台金ニ加
フ
(基力)

第二十三条 小児出生祝儀積立少年新婦ノ私金及遺産
積金其他各種ノ積金ハ毎月定日隨意出金ス
ルニ任ジ郵便局又ハ貯蓄銀行ヘ預入ノ取扱
ヲ為シ利殖ヲ謀ルベシ

第五章 計算

第二十四条 毎年十二月各種貸付ノ計算ヲナシ現量鏡
ニ通ヲ調製シ翌年一月総会ニ報告シ本社ノ
検査ヲ受ケ印刷シテ社員ヘ頒布スベシ

第二十五条 諸貸付金利子収入ノ内善種金其他預金ノ

(基力)

利子ヲ控除シ其余金ハ之ヲ土台金ニ加フベ

(基力)

シ社費ハ土台金ヨリ之ヲ支出ス

第六章 役員

第二十六条 社員公撰ヲ以テ当社ニ左ノ役員ヲ置ク

理事 二名

内社長一名

副社長一名

監事 一名

世話係 十一名

第二十七条 社長ハ社務一切ヲ総理シ副社長ハ之ヲ補
佐シ社長事故アル時ハ其ノ代理ヲ為ス
監事ハ社務ノ協議ニ与リ社務ヲ監査シ会
計ヲ検査ス世話係ハ社員ヲ誘掖シ社長ノ
命ニヨリ事務ヲ担任ス

第二十八条 役員ノ任期ハ三ヶ年トシ満期ニ及ビ定式

總會ニ於テ改撰シ之ヲ本社ニ届出ツベシ

第二十九条 当社ノ役員ハ名譽職トス

但事務取扱ニ係ル実費及社用ニテ旅行ス
ル時ハ旅費ヲ給ス

第七章 社員ノ權利義務

(基力)

第三十条 社員ハ入社ノ際其ノ分ニ応ジ当社ノ土台

金ヲ寄附シ社員ノ証ヲ受クベシ事後八条ノ
目的ヲ達スル為メ適宜寄附スルヲ要ス

第三十一条 社員ハ毎月二十五日善種金積立ヲ払込ミ

常会ニハ必ズ出席スベシ無余儀事故アル時
ハ其ノ旨届出ツベシ

第三十二条 社員ハ役員ヲ選挙シ及ビ總會ニ於テ当社
ノ利害ニ関シ發言投票スル權アリ

但投票權ハ一名ニ付一点トス

第三十三条 社員ハ何時ニテモ当社ノ簿冊ヲ検閲シ及

總會ノ決議ヲ以テ役員ヲ解任スルノ權アリ

第八章 總會及常会

第三十四条 当社ハ毎年一月社員總會ヲ開キ前年ノ諸

計算ヲ報告シ第八条ノ費用其他要件ヲ議定
スベシ定式總會決議ハ出席員過半数ヲ以テ

決ス總會議長ハ社長之ニ任ズ

第三十五条 定款ヲ更正シ若シクハ特別ノ事件ハ臨時

總會ニ於テ之ヲ決スベシ臨時總會ノ決議ハ
總社員過半数出席スルニ非レバ可否ヲ確定

スル事ヲ得ズ

但臨時招集再度ニシテ其数ニ充タザル時

ハ其数ニ関セズ可否ヲ決スベシ

第三十六条 正副社長監事ハ必要ト認ムル事件アル時
ハ何時ニテモ臨時總會ヲ開クノ権アルモノ
トス此ノ場合ニ於テハ予メ議事ノ要領ヲ社
員ヘ通報スルヲ要ス

第三十七条 当社ノ常会ハ毎年四回（一月四月七月十
月定日二十五日）開会シ報徳ノ道義ヲ講究
シ農工商改良ノ方法ヲ談話演説スベシ

第九章 入社退社

第三十八条 当社ニ入社セント欲スルモノハ第三十条
ノ規程ニヨリ社長ニ申告シ總會ニ於テ可否
ヲ決シ而シテ後入社ヲ許ス

第三十九条 社員若シ事故アリテ退社申出ヅル時ハ証
ヲ返納セシメテ退社ヲ許スベシ

第四十条 社員若シ輕罪重罪ノ刑ニ処セラレタル時
ハ刑期後二年迄社員ノ權利ヲ停止ス三年ニ
及ンデ猶悔悟セザルモノハ退社ヲ命ジ社員
ノ証ヲ返納セシムベシ

第四十一条 前条ノ刑ニ処セラレ滿期三年ヲ経ザルモ
ノハ入社ヲ許サズ

但悔悟ヲ表スルモノハ三ヶ年未滿ニ於テ
ハ試業員トシテ入社セシムル事アルベシ試
業員ニハ社員ノ証ヲ附セズ

第四十二条 社員退社スルト雖モ結社中ニ於テハ善種
金ヲ返附セズ

第四十三条 退社員ハ当社ノ措置ニ於テ一切異議ヲ容
ルルヲ得ズ

第十章 雜則

第四十四条 雜則ヲ設クル左ノ如シ

- 一 所有地ノ境界道敷等ハ互ニ相侵ス間敷事
- 一 風俗ヲ改良スベキ事
- 一 地租其他公費ハ無遲滯上納スベキ事
- 一 社員ノ内心得違ノ者アル時ハ互ニ忠告教誡シテ改心セシムル事

第十一章 解社

第四十五条 当社満期又ハ時宜ニヨリ臨時總會ノ決議ヲ以テ解社スル時ハ諸貸付金ヲ徵集シ第一各種預リ金ヲ返付シ第二善種金積立高二分

(基力)

賦シ其余土台金ハ總會ノ決議ニヨリ処分スルモノトス

(基力)

但貸付上損害アリテ土台金ヲ以テ償フ能ハザル時ハ社員預ケ金及ビ善種金トモ平等ニ損害ヲ被ムルモノトス

第四十六条 前条ノ臨時總會ノ決議ハ社員總數ノ三分ノ一以上ニシテ出席員十分ノ八以上ノ同意ヲ得ルニ非レバ可決スルヲ得ズ

一一九 小作契約書

証

字山ノ神百九拾壹番

一 田貳畝貳拾八歩 此宛口米三斗貳升

右之地所本年より明治貳拾四年迄五ヶ年限受作致候処
実正也其定約左の如し

一 前記宛口米ハ壹ヶ年分なり毎年十二月三十日限皆済
可致候若し延引すれば御制定の利子を加へて御取立
或ハ御訴訟相成且小作地御取返被成候共少しも苦情
不申出事

一 米千立仕立方等入念精米四斗入にして其儘地租上納
に秘成候共差支無之様可仕事

一 俵仕立ハ下々俵棧俵古藁にて製し表俵ハ新藁を用い
横縄五ヶ処豎縄四面二廻し入念仕立名札可刺事

一 天災地変に付宛口米難納と見認る時ハ作毛検査を受
候上にて減少可被下然る上ハ苅取着手以上聊苦情不
申出事

一 此地所御入用之節八年限中たりとも返却可致事

一 宛口米運輸漕賃ハ貴家に納る時ハ之を不請して運ぶ
べしと雖其他ハ自村中央より起算し陸里程十丁以内
ハ無賃其余ハ壹俵二付壹丁毎に金壹厘五毛宛舟賃ハ
遠近を不問御渡し可被下尤途中の災難ハ自弁して御
便利の処に可納事

一 前各項目約定仕候上八万一米受取渡之節悪米あれば
精米に引換欠米ハ込米致し必精米四斗入俵相渡可申
事

右各自本人聊にても不埒の節ハ受人より弁償可仕候為
念証書如件

明治廿年四月日

河村郡川上村○○番屋敷戸主

小作人 森田 某

全郡全村○○番屋敷戸主

受人 森田 某

地主全村

森田与重郎殿